

改善力で変化に対応

クラフト紙袋の生産や、包装・物流の企画・設計を手掛けるティ・エス・ケイ(富山市三郷)は月2回、社員表彰式を開いている。一人一人が月に4件提出する「業務改善」実例の中で優秀なものを評価するとともに、関わった社員に内容を発表してもらう。

8月20日には、自動車部品がより多く入るトレー作りや、プラスチック包装材の静電気対策などが表彰された。発表を聞く社員の顔は真剣そのもの。こうやって課題の共有につなげている。

町で創業した富山製袋所。戦前に紙製品は貴重だったため、セメント袋を建設現場で回収し、一部を補修して再利用できるようにする事業だった。

戦後は自社でセメント袋の生産を開始。佐吉朗氏を継いだ長男・和夫氏は76年に富山企業団地に移転させ、機械化を図って石油化学

品やコメ用の袋などに事業を広げた。ただ、和夫氏の長男の悦朗氏が日本興業銀行を辞めて入社した88年には、国内の紙袋生産は低迷期に入っていた。

「次の時代を考えていかなければ駄目だ」と言われた悦朗氏は、ポリエチレンの緩衝材事業を勧められ、エレクトロニクス関連企業

を回って販売活動に励んだ。最初はなかなか相手にされなかったが、企業がパソコン製品を作る段階で緩衝材を設計していくニーズがあると分かった。

3代目社長に就いた悦朗氏は93年に企画事業部を設け、北陸各地の工場を飛び込みで訪問。仕事を受けて会社に戻れば、深夜まで段

移すことにした。

製品よりも壊れにくく、形が単純な部品の包装には、得意分野となっていた複雑な設計が不要だった。それでも、6個人りだった輸送用の箱に8個が入るよう改善させれば、「輸送費が安くなった」と喜ばれた。

「部品包装を考えることは物流を考えることだ」と気付き、物流に関する提案力を高めた。そうしていくと、取引先の可能性は製品メーカーだけでなく、物流費が発生する全ての企業に広がった。

現在の売上高は25億7千万円。今では、物流機器の企画・設計も行っているほか、2014年に包装資材の生産拠点を設けたベトナムにも事業を拡大し、24年まで50億円の達成を目指す。

来年は創業80周年。悦朗社長はその先の行方も見据えながら、取締役営業本部長を務める長男・亮太氏(33)へのバトンタッチも視野に入れる。「確かな上昇気流に乗せて引き継ぐためにも、最先端の分野で役に立てる会社であり続けたい」。こう決意を語った。

(経済部次長・楠浩介)

取り組みが評価され、2018年版中小企業白書には「新たな付加価値を生み出す企業」として紹介された。高木悦朗社長(58)はお客様さまに改善を提案する以上、社内でも常に改善を考えていくことが大切。時代の変化に合わせて、会社が変わっていく上でも必要なことだ」と話す。

同社の前身は、高木佐吉朗氏が1939(昭和14)年、富山市大

老舗のチカラ

ティ・エス・ケイ

富山市三郷



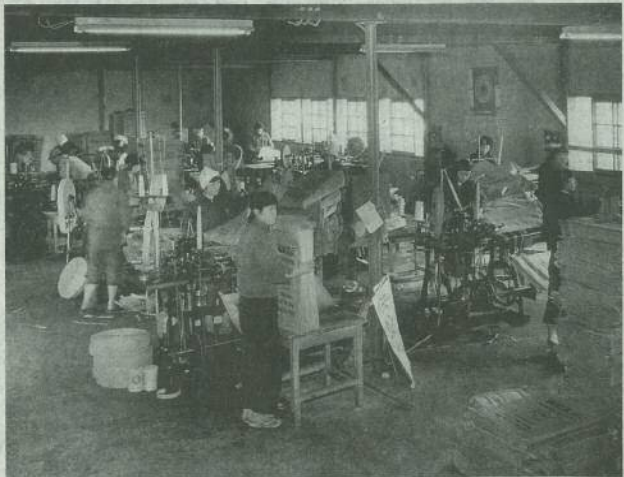
業務改善で表彰

業務改善の表彰式で講評する高木社長(右) | ティ・エス・ケイ(写真部部長テスク・垣地信治撮影)

ボールを切り貼りして試作品を作った。そうやって売り上げが伸びていくと、事業内容と社名が合わなくなる。98年には、「富山製袋所株式会社」のローマ字表記の頭文字から、ティ・エス・ケイに社名を変えた。

時代に追い付いたように思ったものの、時代はさらに前へ進む。取引先のメーカーが、拠点を中国や東南アジアに移し始めたのだ。「製品」の包装ニーズの減少に頭を悩ませる中、地元で製造拠点をある「部品」関係の包装に軸足を

会社メモ 1939年、南富山エリアでセメント袋の再生事業に従事する富山製袋所として創業した。74年に株式会社化し、76年に水橋エリアの富山企業団地に新社屋を建設して移転した。98年から現社名。社員数は80人で、2018年4月期の売上高は25億7000万円。



クラフト紙袋の自社生産を始めた頃の工場
—富山市大町

隔週土曜に掲載します

とやま経済